敷田研オープンゼミ
2021年5月18日(火) 19：00

# 露木恵美子（2019），「「場」と知識創造」，『研究　技術　計画』，34(1)，pp.39-57。

DOI: https://doi.org/10.20801/jsrpim.34.1_39

発表者：田原 洋樹
ファシリテーター：中島 修
グラフィッカー：馬場 武

## 1. 議論の概要

議論は大きく二つおこなわれた。まず，2．場の理論の諸理論と西田の場所論，清水の場と場所に関する考察（本稿のメインでもあるフッサールの 2-4 現象学による場の解釈に入る手前）までのブロックについて内容理解のための議論がなされた。その後，最後まで発表した後，発表者が準備した論点 1 について議論がなされた。

なお，発表者からは，事前に3つの批判点および疑問点と2つの論点が提示されたが，時間の制約上，論点1のみについて議論がおこなわれた。

## 2. 場の諸理論に関する内容理解のための議論

中島：「一即多、多即一」の構造は卵の理論でいうとどの部分に対応しているのか？

田原：多即一，個人と他人は非分離，多数の関係子が寄り添って一つの場を形成する。一即多，一つの場は多くの関係子から構成されている。

中島：この部分の解釈が多様なのではないか。「一即多、多即一（いちすなわちた、たすなわちいち）」は理念のような哲学のような禅の言葉と理解している。どのように紐解いたら良いのか。ここで少々迷う。多面的な捉え方や認識があるのではないか。（参考：鈴木大拙『禅と日本文化』）

中島：一つ一つの理論は理解可能だが，それぞれの理論が合わさっていくときに一つの筋になっているのか見えづらい。そのあたりも議論の中で解いていきたい。

藤岡：理解しやすい卵の理論から理解の端緒を見つけるのはどうか。黄身と白身は絶対混ざらない，黄身は自己中心的な自我，複数の卵があった場合，白身は混ざりやすい。混ざった白身の部分（黄身を含めた卵全体）を場という。

藤岡：西田の理論かえらだらだらと白身は広がっていくとは読み取りづらい。場と場所の違い。場所は場が合わさったものと理解している。

田原：個人（黄身）が関係性を持つことが場，それが収斂して（それぞれの白身が合わさって）場所と理解している。

呉　：卵モデルはもっとも理解しやすい。卵モデルでの輪郭について。参加するアクターによって輪郭が違ってくる。同時に存在することはあり得るのか。

田原：論文内の卵理論を簡素化した図 2-1 を参照。場という要素を包摂するものが場所と捉えられる。器の形＝場の形成作用，白身の形は色々変わるが，黄身は守られているということ。それが場と場所の説明かどうかは不明瞭。

藤岡（チャットで補足）：p.41 右側の下から 8 行目、「日本で場を主題とした思想を展開したのは西田幾多郎である」とありますが、著者も3行先で述べるように、西田幾多郎は「場所」論で、「場」論ではないので、すでに「場所」と「場」がここで同義になっているんです。これで、「場」と「場所」

がわからなくなったんです。上司が来て気まずい、という例からも、卵の黄身は２個でも３個でもいいのではと感じます。２個以上。

岩永：レヴィンの場は集団力学であると理解される。つまり，個人（実体）が存在して，そこの場の相互作用は何か。西田は完全に哲学。西田の特徴は絶対矛盾の自己同一，主体の存在を否定。関係の一時性，関係しか存在しない，実体は捨て去る。今田はシステム論。主体は出てこない。外縁は自己組織性の差異によってのみ決定される。外部からの拘束条件はないと考える。場所的拘束条件（卵の殻）とは何か？存在非拘束性（知識社会学）「個人の思想・考え方・行動は，社会的な条件によって規定されている」という捉え方をする。マルクス→マンハイム。主体が存在する即物的な考え方。実体論。これらを統合するのはなかなか大変，それが卵の理論か。卵の殻の意味が不明瞭，制度的に規定されているのか，場所（実体）に粘着性があるのか（地理学や経済学)。

**2. 発表者からの論点**

**対化が起こる有効な動機とは，「広義の意味での，また通常の意味での関心，つまり特定の情緒がもつ根源的な価値づけ，ないし習得された価値づけとか，本能的な衝動，ないしそれより上層に属する衝動だろう。」(p.49 左 12 行目～15 行目）**

**※議論のポイント　これは地域に例えるとどういうことが言えるのか？**

麻生：シュッツ「集団生活の文化の型」原住民が持っている当たり前の知識を作っていくというのが地域にたとえられる。

田原：地域だけで創り上げてきた固まった価値観・風習・習慣の打破により新たなイノベーションがうまれるが，一方，文化や風習を守ることも大切でバランスが重要。筆者は守る方（暗黙知化されているところが重要）に軸足をおいているように感じる。しかし，実証するのが困難な概念ではないのか。例えば，この論理が海外の方に理解可能なのか。日本人特有の感覚なのか。

呉：雰囲気・空気は理解できる。本論文の論理の理解の差は文化の差ではないと考える。ロジック（抽象的な理解）を整理することが難しい。具体例が現実の問題に当てはめづらいので理解が難しいのではないか。中国においても歴史文化を壊したくないというのは同じ。戦争破壊による歴史文化の断層による認識や意識の違いも存在すると考えられる。

岡田：地域では重層的な対化がおこっている。グローバリズムという対化が地域を壊す。それぞれの地域の中で自己の文化を守ろうとする対化がおこっている。このようなダイナミックな動きがおこっているのではないか。

田原：対化＝化学反応。地域に異質性の高いものが集まることで対化（化学反応）がおこる。むしろこれが起きないと覚起（表出化）までいかない。あえて地域に異質なものを取り入れて対化（化学反応）をおこす。

涌田：デジタル化も同様に考えられる。デジタル化に際しての「高齢者をどう包摂すべきかという問題」もなど。

呉　：中国においても歴史文化を壊したくないというのは同じ。中国では建国において断層がある。戦争破壊による歴史文化の断層による認識や意識の違いも存在すると考えられる。

馬場：場の理論においては，ダイナミクスを捉えるのが得意だが静学的な捉え方は不得意，対して，ネットワーク理論はスタティックな構造を捉えるのが得意。場の理論とネットワーク理論の融合はでき

るのだろうか。

田原：ソフトとハードの両面から捉える必要性。地域には様々な主体が混ざりあう。それぞれが地域貢献活動をおこなう上で，それぞれの黄身をまもり白身を合わせなければならない。地域の二重構造のマネジメントを考えるうえで場の理論は活用可能であると考えられる。

張　：物理から場の理論を捉える。要素が場を構成するのではなく場が要素を構成する。完全に受け入れられないが，古典的物理学の場というより現代物理学（量子力学）の場の考え方。地域の場の定義に現代物理学（量子力学）の場が使えるのではないか。弦理論とループの理論など。地域を構成する量子・因子は？それを連結する関係は？という問いに答えられるのではないか。

岩永：張さんの量子力学の場についてのコメントは物理学の場をメタファーとして社会科学に転用するということと理解される。本論文は経験科学と形而上学が混同された議論ではないか。それぞれの理論は理解可能である。しかし，西田や清水の理論で議論を構成することの学術上の貢献の意義が分かりづらい。西田や清水の理論で議論の対象世界がクリアになるとは考え難い。

藤岡：要素が場を構成するのではなく場が要素を構成する。要素を人と捉えると理解しやすくなる。結束型のソーシャルキャピタルで満たされ，階層化されている地域は，異質性に対する抵抗感が強い。例えばその地域のキーマンとよそ者によって新たな場（時間・空間・要素）を作れば変化を起こすことも可能となるのではないか。新たな場を生む変化を連続的に起こすと新たな創造が起き，新たな普遍ができると著者は言いたいのではないか。

中島：新たな場を作るときの地域への入り方がポイント。地域に入っていくものがもとにあった地域を壊すことなく（否定することなく）入っていくことが肝要。

高野：新たな場を作るときの地域への入り方について。調査地において新たな場が生成されている。地域住民によって関係人口が誘導できたこと（対化）が成功のポイントとなっている。

**形式知と暗黙知の境界および，アーティストの創造と個の関係性についても議論された。**

田原：筆者の問題意識は当初現象学にあった。そこから西田や清水の理論にリーチしている。その後事例研究で場の理論を実証している。長きにわたる研究をおこなっているが，それでも道半ばという筆者に敬服する。

中島：図 3-1 場の理論モデルの境界には何があるのだろうか。暗黙知を形式知に換えるということは，暗黙知を理解するための形式知を手に入れるということ，暗黙知は暗黙知のままだということを理解した。

田原：暗黙知のままで形式化されないものも多い。全て形式化する必要もないのではないか。アーティストが大切にする個の部分は共有することはない。個の中には知識はない，個と個の関係性で知識が生まれる。アーティストは誰とも関係性のない中で作品を創り上げる。これは創造性ではないか。

中島：アーティストは一人でいても関係性を持っている。一即多、多即一のように自分一人でやっていても何かの形で関係性を持っているので作品として形を表出する。個の中に（粒子のような）関係性を持っている。他者の存在がなければ創造はない。

岩永：関係性の中にのみ存在する（ヴィトゲンシュタイン）。私的言語は存在しない，つまり，他者が存在しないところには表現は存在しない。孤独な制作者であっても世界とのコミュニケーションがある。個であっても関係の中に存在する。

### 3. 敷田先生からのコメント

読み応えのある論文（博論のミニ版)。場の理論の全体像がわかる論文。20 年経っても，博論の「知識の塊」が色褪せない論文であった。

場の理論は様々な角度で議論されている。一言では言えないが知識科学では重要な概念。知識創造する場，創造しやすい場が良いということが暗黙の合意になって，そのベースが場。自分がやっていることを全体が意味づけしてくれる。意味の説明をしてくれるのが場。意味づけのない単なる空間は意味がない。場というのはその空間を意味づけしているということ。自分と他者と関係性によって場が形成される。

知識創造理論は企業の研究から端を発している。企業研究は効率性を重視した研究。われわれの対象とするコミュニティは対義的。企業研究とコミュニティ研究の違いが出ている。※ここで，クリエイティブ・ミリュー（創造の場）の紹介。藤岡さんチャットで補足：「クリエイティブ・ミリュー」とは社会の中で創造的な活動に対する承認が多くとられている状態をあらわしており、リスクを怖れず、新しい革新的な活動に対して挑戦しやすい雰囲気が醸成されている社会、都市である。

暗黙知の扱いについて。盲目的に暗黙知を形式知にすればいいと考えているが，暗黙知を保有している方からすると形式知化してほしくないと考えることもある。形式知化されない権利もあるのではないか。

アーティストの問題。アーティストは創造力（想像力）があるので見えない他者を想像して創造している。一般人は具体的な他者が必要ではないか。

場は意味を説明する空間ということは，意味を書き換えることもできる。外から入っている人が意味を書き換えることもある（それを破壊という場合もあるが)。地域活性化事例は場の意味の書き換えとも考えられる。

ゼミも意味を作っていく空間（場)。ゆらぎから全体が形成される＝わかるときは一気にわかるということがおきる。

### グラフィッカー所感

恥ずかしながら，ゼミが終わった後も，頭の整理が追い付かなかったため，著者がこの論文の翌年に出版した露木・山口（2020）を読みました。こちらは一般書ということで，現象学と著者の提示する場の理論モデルについても，今回の論文より噛み砕いた表現と例示を用いて分かりやすく解説されていました。また，事例研究も豊富に収録されており，田原さんがご発表の中で紹介されていた「障碍者施設こころみ学園」や「駿河湾の桜えび漁業」の事例だけでなく，「前川製作所」と「巣鴨信用金庫」の事例も収録されていました。本書の最後のパートは，現象学の哲学者である山口氏と露木氏が事例研究を理論から説明する対談になっており，混乱していた私の理解を促してくれたと思います。

場や場所については様々な学術視点から研究されているため，知と知を組み合わせて新たな理論を構築しようと試してみたくなります。しかし，ただ単に組み合わせるだけでは新たな知は生み出されないということも，本論文の丁寧な論理構築過程から気づかされました。私自身，場の理論にネットワーク科学と経済地理学のイノベーティブ・ミリューを組み合わせて新たな論理構成ができるのではないかと思慮していますが，その目標を達成するためには丁寧な議論を積み重ねる必要があると自戒しました。

露木恵美子・山口一郎（2020)，『職場の現象学:「共に働くこと」の意味を問い直す』，白桃書房。